



## カール・バルトの「信仰の類比」と自然本性論

著者	阿久戸 義愛
雑誌名	倫理学
巻	36
ページ	111-118
発行年	2020-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00162373">http://hdl.handle.net/2241/00162373</a>

# カール・バルトの「信仰の類比」と自然本性論

阿久戸義愛

## 第1節 はじめに

カール・バルトは、人間がどのように神を認識するかについて、「類比」の概念を用いて語る。バルトは特に初期の『ローマ書講解』などにおいて、人間の神認識の直接性を否定したのであるが、では、人間が神認識に至るための「類比」は、一体どこに由来し、またどのようにして「神」認識へと進んで行くとバルトは語るのだろうか。バルトの「類比」概念について検討していく。

バルトは、『教会教義学』第一巻序文において、以下のように述べる。

「私は *analogia entis* を反キリストの発明と見なす。そして人はこの理由でカトリックにはなりえないのだと考える。その際、私は同時に、人がカトリックになりえないと考えるこれ以外のすべての根拠は、近視眼的であり、重要ではないものと考える。」<sup>(1)</sup>

ここで、*analogia entis*、すなわち「存在の類比」は、以下のような論理として理解されている。人間は自らの存在のうちに、神との何らか同質のものを有しており、その存在の同質性から始めて、神の存在を類比的に認識できる。しかし、その同質性はあくまで類比的な同質性であり、真の意味で人間存在が神の存在と同等であるわけではないため、いまだ真の神の認識に到達してはいない、というものである。このような「存在の類比」概念は、トマス・アクイナスの発明によるものであるとしばしば解されており、バルトもそのように理解していると思われるが、トマス自身は *analogia entis* という語を用いてはいない。だが、バルトがこれを、トマス思想の全体を総括する概念であるとして批判したことから、神学的に大きなテーマとして取り上げられることとなった。なお、バルトがトマスをそのように理解したのは、バルトの友人でもあったトマス学者E. プシユワラのトマス理解を前提にしている、と片山寛は指摘している<sup>(2)</sup>。

バルトにとつては、『ローマ書講解』の中で激しく主張されたとおり、人間の存在ないしは自然本性 (*natura*) は完全に損なわ

れたものであって、人間が存在的に神と同等性を有すると主張したり、そこから神の認識を語ったりすることは不可能であった。その立場は『教会教義学』に至っても変わっていない。しかし、バルトは人間の存在や自然本性について、必ずしも、まったく救い難いものであると主張しているわけではない。むしろ、完全に損なわれた存在や自然本性が救われ、肯定されうる道筋を、『教会教義学』の中に見て取ることができる。このことはバルトの人間存在理解を把握する上で重要である。ここではまず、自然本性との関わりから、トマスとバルトの神認識に関する類比の問題を手がかりに、人間存在についての問題を見ていきたい。

## 第2節 「存在の類比」における自然本性の肯定

上述の通り、トマス自身は *analogia entis* という語を用いてはいない。しかし、トマスのアナログア論の中に、「存在の類比」に関連していると思われるものは指摘されうる。トマスがアナログア論を展開している『神学大全』<sup>(3)</sup> 第1部第13問題「神の名について」第2項「神について実体的な仕方では語られるような何らかの名称があるか」において、トマスは次のように論じている。多種多様な被造物の完全性は、その根源である神において予め「先在」しており、被造物は神から「発出」して諸事物に流入した何らかの類似性を獲得する限りにおいて神を表現し、認識する

ことができる。このような「先在」と「発出」が、トマスのアナログア論の構想を支えている。そして、このアナログア論を支える先在と発出という存在論の背景には、「存在の分有」という概念がある。この「存在の分有」については、『神学大全』第1部第4問題第3項で述べられている<sup>(4)</sup>。ここでトマスは、神と被造物とを明確に区別しており、神は類の根源としてあらゆる類の外にあるとされている。一方で、神と被造物との間には共通しているものがある。それが「存在」(*esse*)である<sup>(5)</sup>。万物の第一原因としての神は存在そのもの(*ipsum esse*)<sup>(6)</sup>であり、この存在を通して神と被造物としての多種多様な存在者との区別と共通性の中間、すなわちアナログアを見ることができるのである。このように、「存在の分有」が、トマスのアナログア論を支えているのである。

トマスが「神は善なるがゆえにわれわれは存在する」<sup>(7)</sup>と述べているように、トマスにおいて存在そのものは善であり、その存在者の自然本性は、この根源としての神の次元を本性的に志向するものとして、「存在者の自己実現の終極としての意味があり、その限りでその存在者の完全性の基準である」<sup>(8)</sup>ものとして、肯定的な意味を持つ。

以上、トマスのアナログア論において、人間存在とその自然本性がどのように肯定的に理解されているかについて見てきた。もちろん、トマスの存在理解においても、神の存在と人間の存在と

の間には懸隔もある<sup>(9)</sup>。したがって、自然本性は無条件に肯定されるものでもなく、また単純に否定されるものでもない。このような中間性に、トマスのアナログア論の特徴がある。そして、この中間性に、恩寵が働く契機をトマスは見ており、ここでこそ自然本性は肯定される<sup>(10)</sup>。つまり、トマスのアナログア論において、自然本性は恩寵による自己超越へと開かれているものとして、大きく肯定されているのである<sup>(11)</sup>。

### 第3節 バルトにおける自然本性の否定

では、バルトは「類比」についてどのように語っているだろうか。バルトは『教会教義学』第2巻§ 25・27で神認識の問題を取り上げて、「信仰の類比」(analogia fidei) という概念を語る。ここでは、バルトにとっての「類比」の概念、すなわちバルトが「信仰の類比」という概念でもって何を語ろうとしたのかを見ていく。バルトは神認識について語る際、(1)実現 (§ 25) (2)可能性 (§ 26) (3)限界 (§ 27) という順で考察を進めている。これは、たとえばカントの神認識についての論述 (1)思弁理性性による「物自体の認識不可能性」(限界) (2)実践理性性によって「要請される神」(可能性) (3)道徳的立法者の理念(実現)とは逆の順序になっている。バルトは、理性の限界内で可能なことを選び取り、そうすることによって自己を実現していくような道ではなく、神

によって既に「実現」している現実の認識からはじめて、そこから人間の可能性と限界とを考察していく。

バルトは、何らかのものの認識から類比的に神認識へと至ろうとする「類比」について、どのように考えているのであろうか。バルトも、人間と神との間に積極的・現実的な交わりが既に成立していることを認め、その上でバルトは「中間性」(単純な同一性でもまったくの不同一性でもない)としての類比があることに同意している<sup>(12)</sup>。しかし、「類比」は問題も含んでいる。バルトは17世紀のルター派神学者クエンシユテットを批判しながら、アナログア論の問題を指摘している。クエンシユテットが「譲与のアナログア」(analogia attributionis)<sup>(13)</sup>によって類比的に神認識に至ろうとする道を取ったことには賛同しつつも<sup>(14)</sup>、バルトはクエンシユテットが、その類比が「内的な譲与」(attributio intrinseca)によって与えられるとしたことを批判した<sup>(15)</sup>。内的な譲与が成り立つならば、それが譲与する神の絶対性と譲与される被造物の依存的関係性を厳格に捉えているとしても、神と人間とが内的・実体的に共通性・同等性を有することになる。その場合、この内的共通性・同等性に基づいて、それ以上の神の恵みを必要としないことになってしまう。それに対してバルトは、罪人である人間に内的に義が見出されないにもかかわらず、ただ愛の神から恩寵とその神への信仰によって「外的」に義とされる、というルターの義認論の本質から離れてしまっている、と批判したのである<sup>(16)</sup>。ク

エンシュテットのアナログア論はキリストを抜きにしても成り立つような一般的な存在についての真理であつて、それでは類比は一般的存在に内在していることになる<sup>(17)</sup>。バルトはこのような一般的な存在から議論をはじめて神認識に至ろうとする類比の道に反対したのである。

それでは、バルトにとつて類比とはどのようなものとなるのだろうか。前述のようにバルトは類比を論じる際、常に義認論を念頭におきつつ、神と人間との積極的關係性が、ただ恩寵によつてのみもたらされたものである、という立場を固持した。神が行動し、神が人間に対し、キリストにおいて自らを与えたことによつて、人間は神を見、認識することができ<sup>(18)</sup>。このような、相手側に義がないにも関わらず無償で与えられるキリストの恩寵に対応して、人間の側も類比的に神に対して、ただ恩寵のみ、信仰のみという立場で相対するようになる。このような神と人との關係のことを、バルトは「信仰の類比」(analogia fidei)と言う。バルトは次のように述べている。

「神と人間の間には、いかなる存在の類比(analogia entis)もない。あるのは信仰の類比(analogia fidei)だけである。」

(19)

このようにバルトは、存在の類比を否定し、自然神学の徹底的な

否定に向かう。

『教会教義学』第2巻§ 26「神の認識可能性」において、バルトは自然神学の問題点について次のように論じる。第一に、自然神学は、自然的人間の生きる営み以上のものでなく、人間の営みによつて造り上げた偶像を認識するに留まるものであり、そこから真の実在である神認識に至ることはない<sup>(20)</sup>。第二に、自然神学は、人間の自然本性に結びつくものであつても、そこから実在の神に結びつくものではない<sup>(21)</sup>。第三に、自然神学は、自然神学自身が求めているような啓示の線から独立して平行している自然的な線などではなく、あくまで啓示を指し示す傍線としてのみ存在するのである<sup>(22)</sup>。さらに、バルトは自然神学の議論の根底にある自然本性そのものが、無力なだけでなく有害なものである、とまで言う。自然本性は、恩寵に対して抗争關係にあり、自力の道を歩もうとする自然本性は恩寵という他力に救われることを望まない<sup>(23)</sup>。そのため自然神学は、人間の自己保持と自己正当化の試みに他ならない、と言う<sup>(24)</sup>。したがつて、自然神学は、それが啓示や恩寵を優先しているように見えるものであつても、それは結局、啓示の「飼ひ馴らし」に過ぎないとされる<sup>(25)</sup>。このような観点から、バルトによつて自然本性は徹底的に否定されている。

#### 第4節 關係の類比

以上のように、バルトは存在の類比と自然本性の重視を徹底的に否定しているが、『教会教義学』第3巻「創造論」に至ると、上述のような信仰の類比と存在の類比との対立図式は次第に薄れていき、代わりに「関係の類比」(analogia relations)という新たな概念を主張するようになってくる。そして、ここでは、従前の自然本性の徹底的否定が幾分薄れ、むしろ自然本性が肯定的に語られうる可能性が見えてくるようになる。

「創造論」において、バルトは、創世記にある神の似像について、神の本質の複数形に着目し、人間が神にかたどって創造されたことの意味は、人間が「男と女」のような相互に「関係的存在」として創造されたことである、とする<sup>(26)</sup>。そして、一方の「関係的存在」である神の本質に、他方の「関係的存在」である人間の本質が対応関係にある、としている。ここから、バルトの「関係の類比」という概念が出てくる。神の本質と人間の本質がともに「関係的存在」であることから、原像(Urbild)と模像(Abbild)との絶対的な差異性がありつつも、神と人間との間のある種の同等性を語ることが可能となる。

このような関係の類比の主張は、これまでのバルトの「質的差異」や「信仰の類比」という思想への裏切りではないか、「関係の類比」は「存在の類比」に他ならないのではないか、という疑問が生じてくるだろう。しかし、バルトはここにおいても依然として「存在の類比」を否定している<sup>(27)</sup>。以下、このバルトの論理

を見ていく。

男と女の関係は、それだけを見るならば神の似姿としての人間だけでなく、およそすべての被造物に共通している。それにもかかわらず、バルトは人間においては神との特別な「関係の類比」が成り立つと言う。この神に対する人間の関係的存在は、人間が自身に負っているのではなく、人間の希望を神に置くように神から特別に差し向けられていることに根拠を持っている<sup>(28)</sup>。関係の類比は、存在の類比のように人間存在の内的・実体的な類比として語られるのではない。人間が関係的存在であるのは、神の業、および神の賜物としてであって、決して人間が所有するところのものとはならない<sup>(29)</sup>。神との関係性の根拠、神認識の根拠が、決して人間の所有とならないという状態に人間は置かれるのであるが、それでもバルトがここで念頭に置いているのは、具体的かつ確かな恩寵の現実である。男と女としての人間の間は、この男(キリスト)と女(教会)との関係に基礎を持っており、関係的存在としての人間はこのようなキリストと教会の関係を仰ぎ見る<sup>(30)</sup>。そこから、バルトは、関係の類比はキリストの恵みの交わりに入れられている人間の間にあるような類比的な関係へと、神から招き入れられている。その限りにおいて、人間の本質は関係的存在である。そして人間は、その本性的が完全に損なわれたままでありつつ、この恵みの関係に与っている。バルトはキリストを通し

て、人間の本質が関係的存在であることを理解し、そこに成立する関係の類比によって神認識へと向かうことができるとした。

## 第5節 結語

キリストを通して人間の本質が関係的存在であるとし、キリストを通して神との共通性に類比を見ていくことが「関係の類比」であった。

先に見たようにバルトは、人間の自然本性に基礎を置く自然神学の試みを、自己保持と自己正当化として徹底的に否定した。しかし、そのバルトにおいても、なおも人間の自然本性はある仕方肯定されるということを、最後に確認しておきたい。

バルトは、その思想全体を通じて、人間の罪の問題を重視してきた。人間の罪は、徹底的かつ全体的なものである。しかし、他方でバルトは罪の問題を重んじすぎることもない。なぜならば、それはキリストの恵みを否定することにもなるからだ。罪は徹底的・全体的であるが、最終的ではないのであって、罪によっても決して無くなることのない神の被造物としての人間の本質をバルトは認める。決定的で全体的なのは、罪ではなく、恩寵だけである。バルトが罪の問題を軽んじることも重んじ過ぎることもないのは、キリストとの恩寵関係の現実、しっかりと立ち続けているからである。現実の人間は、義人にして罪人、すなわち神の

恵みに与っている罪人である<sup>(31)</sup>。「神の恵み、すなわち人間と神が結ばれた神の契約が第一であって、人間の罪は第二である」<sup>(32)</sup>。したがって、決定的な罪の状態にありながらも人間の自然本性について肯定的に言及できる可能性が、この恵みの現実のなかから出てくる<sup>(33)</sup>。何よりもまず、キリストの中にある人間の自然本性に目を注ぎ、そこから人間の自然本性がはじめて説明されていく<sup>(34)</sup>。これが、バルトにおいて、罪人である人間の完全に損なわれた自然本性であっても、神がキリストにおいて人間の存在すべてと関係を持つことによって、善き被造的本性であるとして、自然本性を肯定することができる道である。バルトにおいて、キリストにある神との関係性、関係の類比こそが人間の自然本性を語る正しい道筋であり、キリストとの関係にあつて人間の自然本性ははじめて真に見出される。そのため、罪にもかかわらず罪をも越えて、自然本性を肯定する可能性が、人間の「関係的存在」という存在概念から見て取ることができるのである。

## 註

- (1) KDI/L. Vorwort 8f.
- (2) 片山寛『トマス・アクイナスの三位一体論研究』創文社、一九九五年、二〇四頁。
- (3) トマス・アクイナス、高田三郎訳『神学大全 I・1』創文社、一九六四年。

- (4) 「もしも類のうちに包含されない何らかの作用者が存在するとすれば、その結果は作用者の形相に、作用者からなおいつそう距たったところで似ることになるであろう。しかしそれは、種や類の性格を同じゅうするという仕方  
で作用者の形相の類似性を分有するのではなくて、存在するということが万物に共通であるように、何らかのアナログアによって作用者の形相の類似性を分有するであろう。神によって存在するものは、それが存在するものであるかぎりにおいて、このような仕方  
で、全存在の第一の普遍的根原たる神に似るのである。」(山田晶訳『トマス・アクイナス』(世界の名著20) 中央公論社、一九八〇年、一八八頁)
- (5) 「神は本質的に有であり、被造物は分有によって有であるという共通性」高田三郎訳(同項)。
- (6) 『神学大全』第1部第2問題第1項、第3問題第4項。
- (7) 『神学大全』第1部第13問題第2項。
- (8) 桑原直己『トマス・アクイナスにおける「愛」と「正義」』知泉書館、二〇〇五年、七八頁。
- (9) 「被造物的な知性は、それゆえ、もし神がその恩寵によって自らを、被造物的知性にとつての可知的なものとして、これに結合するのでない限り、神をその本質において見ることは決してできないのである。」『神学大全』第1部第12問第4項)

- (10) 「神についての、自然本性的な理性による以上の完全な認識が、恩寵 *gratia* によって得られるのである。……人間的な認識は、恩寵の啓示 *revelatio gratiae* によって援助される。」『神学大全』第1部第12問第13項)
- (11) 「恩寵 *gratia* は、だから自然的本性 *natura* を廃棄するものではなく却ってこれを完成するものである。」『神学大全』第1部第1問第8項)
- (12) KDII.1. 254.
- (13) 何らかの共通するものが一方のものが他のものに依存する関係にあるとき、依存するものに依存されているものとの何らかの共通性が譲与・付加される、というアナログア。
- (14) KDII.1. 269.
- (15) *ibid.* 269.
- (16) *ibid.* 270.
- (17) *ibid.* 271f.
- (18) *ibid.* 8.
- (19) KDI.1. 459.
- (20) KDII.1. 93f.
- (21) *ibid.* 96f.
- (22) *ibid.* 110f.
- (23) *ibid.* 148.
- (24) *ibid.* 150f.



- (25) *ibid.* 152f.  
 (26) *KDIII/1.* 220.  
 (27) *ibid.* 219.  
 (28) *ibid.* 213.  
 (29) *ibid.* 226.  
 (30) *ibid.* 213.  
 (31) *KDIII/2.* 36.  
 (32) *ibid.* 36.  
 (33) *ibid.* 48.  
 (34) *ibid.* 54.

(あぐど・よしや 東北学院大学講師)